

制御焦点がパフォーマンスに及ぼす影響

— 上位目標の活性化と下位目標の達成の観点から —

外山美樹¹ 長峯聖人² 湯立³ 三和秀平⁴ 相川充⁵

^{1,2,3,4,5} 教育テスト研究センター ^{1,3,5} 筑波大学人間系

² 筑波大学大学院人間総合科学研究科 ⁴ 信州大学学術研究院教育学系

本研究では、上位目標が活性化されている場合の、制御焦点と下位目標の達成が後続課題のパフォーマンスに及ぼす影響について検討することを目的とした。実験参加者は大学生 64 名であり、実験的に操作された状況としての制御焦点を用いた。本研究の結果より、上位目標が活性化されていれば、防止焦点は下位目標が達成されていても後続課題のパフォーマンスは、促進焦点と同程度であることが示された。また、防止焦点においては、下位目標未達成条件におけるパフォーマンスは促進焦点よりも高かった。本研究より、下位目標が達成された時と達成されていない時における後続課題のパフォーマンスが、制御焦点によって異なること、さらに、そのパターンは上位目標の活性化によって異なることが示された。制御焦点とパフォーマンスの関連を検討する際には、複数の目標の中での当該目標のパフォーマンスについて検討していく必要性が示唆された。

キーワード：促進焦点，防止焦点，パフォーマンス，上位目標，目標達成

1. 問題と目的

1.1 はじめに

同じ人であっても、動機づけの状態や文脈によって、異なったパフォーマンスを示す。本研究では、動機づけの問題として制御焦点を取りあげ、制御焦点がパフォーマンスに及ぼす影響を、上位目標の活性化と下位目標の達成の観点から検討することを目的にしている。

1.2 制御焦点理論

Higgins(1997)は、目標に対する志向性を特徴づける理論として、制御焦点理論(regulatory focus theory)を提唱した。制御焦点理論では、人の目標志向性には、獲得(gain)の在に接近し、獲得の不在を回避するよう動機づけられる促進焦点(promotion focus)と、損失(loss)の不在に接近し、損失の在を回避するよう動機づけられる防止焦点(prevention focus)の2つがあると仮定している。

ひとりの人間は促進焦点の動機づけと防止焦点の動機づけの両方の動機づけを保有しているが、どちらが優勢になるかを規定する要因は、置かれている状況である(Eitam, Miele, & Higgins, 2013; Higgins, 1997)。そこで、制御焦点に関する研究では、フレーミングやプライミングの手法を用いて、促進焦点あるいは防止焦点を活性化させ、それによって発現する特徴について検討することが多い。

促進焦点あるいは防止焦点を活性化させるために、たとえば、基準を上回っていれば報酬を獲得することができるが上回っていなければ報酬を獲得することができないと教示する条件(促進焦点条件)と、基準を下回っていれば報酬を失うが下回っていなければ報酬を失うことはないと教示する条件(防止焦点条件)を設定したり(Rosenzweig & Miele, 2016;

Shah, Higgins, & Friedman, 1998), 自己について考えさせる際に, 理想自己を考えさせる条件(促進焦点条件)と義務自己を考えさせる条件(防止焦点条件)を設定したりする(Higgins, Idson, Freitas, Spiegel, & Molden, 2003)。このように, 獲得や理想の状況あるいは損失や義務の状況を喚起させることによって間接的に, 各個人の中に促進焦点か防止焦点かいずれかの動機づけを優勢的に活性化させる。

こうした手法を用いて活性化された制御焦点(促進焦点, 防止焦点)は, 望ましい目標の最終状態に向かって質的に異なった志向を持つため, 評価や情報における敏感さ, 推論や判断方略, 目標遂行過程において, 異なる特徴を有することが示されている(Molden, Lee, & Higgins, 2008)。

1.3 制御焦点がパフォーマンスに及ぼす影響

制御焦点とパフォーマンスの関連を検討した近年の研究では, 課題のタイプによって, 促進焦点あるいは防止焦点のパフォーマンスのどちらが優位となるのかが異なることが示されている。

たとえば, 速さや創造性課題においては, 促進焦点は防止焦点よりもパフォーマンスが優れている(Scholer & Higgins, 2012)。他方, 正確さや分析的な課題においては, 防止焦点が促進焦点よりもパフォーマンスが優れている(Scholer & Higgins, 2012)。また, 一般的な認知課題(e.g., アナグラム課題, 計算課題)においては, 促進焦点と防止焦点のパフォーマンスの差が見られないことも報告されている(e.g., Shah et al., 1998)。

さらに, 近年では, 文脈を加味した検討が行われ始めている。外山他(2019)は, 促進焦点と防止焦点の両方でパフォーマンスの有利さに差が見られない一般的な認知課題(計算課題)を用いて, 制御焦点とパフォーマンスの関連を, 目標達成の観点から検討した。外山他(2019)は, 実験課題(計算課題)に取り組む前に別の先行課題を実験参加者に実施することによって, 先行課題の目標達成/未達成の状況を操作した。その結果, 促進焦点では, 目標達成と目標未達成の両条件で実験課題(計算課題)のパフォーマンスに差は見られなかったが, 防止焦点では, 目標達成条件が目標未達成条件よりもパフォーマンスが低かった。また, 目標未達成条件においては, 防止焦点と促進焦点の間でパフォーマンスに差は見られないが, 目標達成条件においては, 防止焦点は促進焦点よりもパフォーマンスが低いことが示された。

外山他(2019)では, 1つの目標を達成した際には, 防止焦点は促進焦点よりも後続課題のパフォーマンスが低いことが示されたが, この結果を一般化するのには早計であろう。なぜなら, われわれは複数の目標を同時に抱えているため, 目標間のバランスの中で, 各目標の働きについて考えていく必要があるからである。

では, 促進焦点と防止焦点の間でパフォーマンスの有利さに差が見られない一般的な認知課題(計算課題)において, 先行課題における目標が達成されると, なぜ, 防止焦点は促進焦点よりもパフォーマンスが低くなるのであろうか。そのメカニズムの説明として, 本研究では, 1つの下位目標の達成が別の下位目標の追求に及ぼす影響を検討したFishbach, Dhar, & Zhang(2006)の知見を援用したい。

1.4 1つの下位目標の達成が別の下位目標への追求に及ぼす影響

目標は記憶内で階層的な表象構造を形成していると考えられている(Vallacher & Wegner, 1987)。1つの上位目標(e.g., 学業達成)には, 複数の下位目標(e.g., 良い成績をとる)があり, さらにその下には当該目標を達成するための具体的な目標(e.g., 授業の予習・復習をする, テスト勉強に励む)が連合していると考えられている(e.g., Carver & Scheier, 1998; Gollwitzer, 1999; Shah & Kruglanski, 2003; Vallacher & Wegner, 1987)。一般に人は同時にたくさんの目標を抱えているため, 下位目標間のバランス(cf. Dhar & Simonson, 1999; Fishbach & Dhar, 2005)の中で目標追求を考えていかなければならないが, その点を考慮し

た研究はほとんど見られない。

上位目標に関連した下位目標間の目標追求のプロセスについて検討した数少ない研究に、Fishbach et al. (2006)がある。Fishbach et al. (2006)は、人は、上位目標を意識していない場合（具体的には、上位目標を活性化させる実験手続を行っていない場合）では、1つの下位目標を達成すると、別の下位目標を追求しなくなることを示した。具体的には、研究1では「1週間後に試験がある」という仮想場面を大学生に提示した後に、下位目標達成条件では「今日の昼間、あなたはたくさん勉強した」と教示し、下位目標未達成条件には「今日の昼間、あなたはいつも通りに勉強した」と教示した。そして、別の下位目標を追求しようとするか尋ねた。ここでは、夜の勉強時間をその指標とし、「夜、どのくらい勉強すると思うのか」尋ねた。その結果、目標達成条件のほうが、目標未達成条件よりも有意に別の下位目標の追求が弱いことが示された。研究2では、目標達成・未達成を社会的比較（上方比較、下方比較）を用いて操作しているが同様の結果が得られた。研究3では、目標達成条件（先行課題において、“あなたの成績は、他の人たちよりも優れていた”と教示）のほうが、目標未達成条件（先行課題において、“あなたの成績は、平均以下でした”と教示）よりも、後続の解決不可能な課題における従事時間が有意に短いことが示された。これらの研究結果から、1つの下位目標が達成されると別の下位目標を追求しなくなることが示された。

Fishbach et al. (2006)は、1つの下位目標を達成すると、目標を完遂したという感覚が生じるため、目標からの解放を正当づけることにつながり、別の下位目標を追求しなくなる可能性を指摘している。Fishbach et al. (2006)の研究は、別の下位目標を追求するのかどうかを、結果（e.g., パフォーマンスや行動）ではなく動機づけの観点から検討したものであるが、この知見に鑑みると、外山他（2019）の結果は、防止焦点においては、1つの下位目標が達成されることによって別の下位目標への追求の動機づけが低下し、その結果、後続課題のパフォーマンスが低下したが、促進焦点においては、そのような傾向は見られなかったと解釈することが可能である。つまり、Fishbach et al. (2006)で示された、1つの下位目標が達成された場合の別の下位目標への追求の傾向は、制御焦点によって異なることが示唆される。

防止焦点は、損失の不在や損失の回避に動機づけられているため、警戒的で慎重な処理スタイルをとりやすい（Higgins, 2008）。そうした警戒的で慎重な処理スタイルは、有限な認知資源をより多く消耗する特徴があるため（De Dreu, Baas, & Nijstad, 2008）、防止焦点は、認知資源が不足することに対して敏感で、認知資源を投入することに慎重になる必要がある（Roskes, Elliot, Nijstad, & De Dreu, 2013）。外山・湯・長峯・三和・相川（2019）では、防止焦点は、認知資源を節約・温存する傾向があり、重要な状況においてのみ認知資源を投入しようとすることを示している。つまり、防止焦点に動機づけられている人は、目標を達成した後の課題は重要ではないため、その課題に認知資源を投入する必要はないと意図し、その結果、目標が達成されている状況では未達成時に比べて、パフォーマンスが低下したのではないかと考えられる。

1.5 上位目標が活性化されている場合の目標達成がパフォーマンスに及ぼす影響

先に紹介したFishbach et al. (2006)では、上位目標を活性化すると、1つの下位目標の達成は全体的な目標のコミットメントを強めることにつながるため（e.g., Bem, 1972; Festinger, 1957）、1つの下位目標の達成によって、別の下位目標の追求への動機づけが高まることを併せて示している。

上位目標の活性化には様々な方法があるが、目標は上位になるほど、その抽象度が増す（Unsworth, Yeo, & Beck, 2014）ため、当該目標に関連する、より抽象度の高い目標を活性化させることで、実験参加者の上位目標を設定させる方法がある。たとえば、Fishbach et al.

(2006, study1,3) は、実験参加者に乱文構成課題を実施することによって上位目標の活性化を行った。乱文構成課題とは、いくつかの単語を並べて文章を構成させる課題を行わせる際に、概念関連語を単語の中に混ぜておく罫上プライミングの手法である。この研究では“学業達成”という上位目標を活性化させるために、“achieve”, “diligent”, “success”という単語を入れておいた。また、Fishbach et al. (2006, study 4) では、遠い将来のこと、具体的には、試験が1ヶ月後にあることを実験参加者に想像させることで、上位目標の活性化を行った。これは、時間的に近い目標（近接目標）を追求する際には、具体的な目標に焦点が当たり、時間的に遠い目標（遠隔目標）を追求する際には、より抽象度の高い目標に焦点が当たるという先行研究（Trope & Liberman, 2003）の知見に基づいた操作である。

Fishbach et al. (2006, study 3) では、乱文構成課題によって学業達成という上位目標を活性化された実験参加者は、下位目標達成条件（先行課題実施後に“あなたの成績は、他の人たちよりも優れていた”と教示）のほうが下位目標未達成条件（先行課題実施後に“あなたの成績は、平均以下でした”と教示）よりも、後続の解決不可能な課題における従事時間が長いことが示された。他の研究（研究1, 研究2）においても、上位目標の活性化を行うと、下位目標達成条件のほうが下位目標未達成条件よりも別の下位目標への追求の動機づけが高いことが示されている。

1.6 本研究の目的

本研究では、上位目標が活性化されている場合の、制御焦点と下位目標の達成がパフォーマンスに及ぼす影響について検討することを目的とする。具体的には、防止焦点時において、上位目標が活性化されていれば、下位目標が達成されても後続課題のパフォーマンスが低下しないという仮説を検討することを目的とした。上位目標が活性化されている場合の、制御焦点と下位目標の達成が後続課題のパフォーマンスに及ぼす影響について検討することで、制御焦点とパフォーマンスの関係における目標達成の影響について理解する一助となるだろう。

外山他（2019）の目標達成条件における促進焦点と防止焦点のパフォーマンスの差は、防止焦点の動機づけに起因するものであるため、上位目標が活性化されていれば、下位目標達成条件における防止焦点のパフォーマンスは、促進焦点のパフォーマンスと同程度である（差がない）と考えられる。しかし、統計学的検定において「差がないこと」を実証するのは難しいため、作業仮説を立てるにあたって、以下のように考えた。

上位目標の活性化を行えば、下位目標達成条件では、促進焦点と防止焦点の間に後続課題でのパフォーマンスに差は見られないだろう。また、上位目標の活性化を行えば、下位目標達成条件のほうが下位目標未達成条件よりも別の下位目標への追求の動機づけが高いというFishbach et al. (2006) の知見に基づくと、防止焦点における下位目標の単純主効果が見られ、下位目標達成条件のほうが下位目標未達成条件よりもパフォーマンスが高いと考えられる。一方で、促進焦点における下位目標の単純主効果においては、仮説を立てずに、探索的に検討することにした。以上を踏まえて、本研究の作業仮説は、以下の2つのいずれかが見られるというものである。

1. 制御焦点（促進焦点, 防止焦点）と下位目標（達成, 未達成）は、後続課題のパフォーマンスにおいて両要因の交互作用の効果が見られる。すなわち、下位目標達成条件における促進焦点条件と防止焦点条件のパフォーマンスに差は見られないが、下位目標未達成条件においては両条件間でパフォーマンスに差が見られる。防止焦点条件は、下位目標達成の時に、下位目標未達成時と比べてパフォーマンスが高い。

2. 下位目標（達成, 未達成）の主効果のみが見られ、制御焦点にかかわらず、下位目標達成条件は、下位目標未達成条件よりもパフォーマンスが高い。

2. 方法

2.1 実験参加者

大学生 64 名（男子 31 名，女子 32 名，その他 1 名，平均年齢(SD)=19.48(1.06))であった。

2.2 実験計画

本実験は，制御焦点（促進焦点，防止焦点），下位目標（達成，未達成）の 2 つを独立変数とする実験参加者間計画であった。実験参加者 64 名を，16 名ずつ 4 条件（「促進焦点＋下位目標達成」，「促進焦点＋下位目標未達成」，「防止焦点＋下位目標達成」，「防止焦点＋下位目標未達成」）のいずれかに割り当てた。

2.3 制御焦点の操作

促進焦点条件 ($n=32$) では，実験参加者の課題 1 の成績が，一般大学生の平均以上（上位 50%以内）の成績に入るように教示し，防止焦点条件 ($n=32$) では，実験参加者の課題 1 の成績が，一般大学生の平均以下（下位 50%以内）の成績に入らないように教示した。目指す目標は同じであっても，促進焦点条件では獲得に，防止焦点条件では損失に焦点が当てられている。こうした方法は，制御焦点の活性化の有効な手法として用いられている（e.g., Rosenzweig & Miele, 2016; Shah et al., 1998）

2.4 下位目標の達成の操作

課題 1 終了後に，促進焦点，防止焦点条件別に，下位目標の達成の操作を行った。促進焦点条件では，下位目標達成は“平均以上に入ることができた”，下位目標未達成は“平均以上に入ることができなかった”と教示を行った。防止焦点条件では，下位目標達成は“平均以下に入ることが回避できた”，下位目標未達成は“平均以下に入ることが回避できなかった”と教示した。

2.5 実験課題と実験手続き

実験は 1 人ずつ実験室で行った。実験参加者に実験についての説明を十分に行い，同意書への署名を求めた。なお，実験参加者には，本実験では，創造性を測定する課題を実施すると説明した。

まず，学業達成に関する上位目標を活性化させるために，先行研究（Fishbach et al., 2006, study 4）を参考にし，実験参加者に将来の学業達成に関する目標を自由記述させた。回答時間は 2 分間であった。

続いて，制御焦点の操作を行った後に，課題 1 を実施した。課題 1 を行う前には，それらの課題の成績が大学生の学業達成と関連していることを実験参加者に教示した。課題 1 は，拡散的洞察課題（UUT ; Unusual Use Test, Guilford, 1967）を用いた。UUT は，日常で使うモノの通常とは異なる使い方をできるだけ多く回答するもので，創造性の拡散的思考を測定する課題として使用されている。山岡・湯川（2017）に準拠し，例題として「レンガ」（回答時間は 30 秒），本題として「靴下」と「缶詰の缶」（回答時間はそれぞれ 2 分間）を出題した。

課題 1 が終了した後で，本実験には関係のない質問紙に回答してもらった。その質問紙を実験参加者に渡す前に，質問紙に回答している間に実験者が実験課題の採点を行うこと（実際は，採点を行っているふりをした），質問紙回答後に結果をフィードバックする旨を伝えた。その後，下位目標の達成の操作を行った。

続いて，課題 2 を実施した。実施する前に実験参加者に，創造性とは異なる課題であるが，著者らが開発している知能検査の予備実験の課題を実施し，課題終了後に成績をフィードバックすると伝えた。また，課題 2 の成績が大学生の学業達成と関連していることを実験参加者に教示した。

課題 2 は，佐藤（2003）の計算課題を用いた。この計算課題は，不完全な不等式の左辺

の数字の間（問題文には□で記されている）に4種類の演算子（+，-，×，÷）のいずれかを当てはめて等式を成立させる課題である（e.g., $1 \square 5 \square 7 \square 4 = 8$ ）。佐藤（2003）より20問を選択した。なお、予備調査（ $n=20$ ）を実施し、促進焦点と防止焦点でパフォーマンスに差がみられないことを確認した。制限時間は、予備調査の結果をもとに、制限時間内に全問解くことができない10分とした。課題のやり方を説明し、例題を遂行させ、やり方を理解していることを確認した上で本課題を実施した。本研究では、別の下位目標の追求を示す指標として、パフォーマンス（計算課題の正答数）を用いた。

課題2が終わった後、実験操作のチェックを口頭で行った。具体的には、制御焦点の操作と下位目標の達成の操作として用いた教示を、実験参加者に再生してもらった。

実験終了後、デブリーフィングとして実験の目的を伝え、デブリーフィング後の同意書の記入を求め、謝礼として500円のクオカードを渡し、すべての実験を終了した。なお、研究の実施にあたっては、著者らが所属する大学の研究倫理委員会の承認を得た。

3. 結果

制御焦点の操作ならびに下位目標の達成の操作で用いた教示を間違えて理解していた実験参加者は、誰もいなかった。また、実験参加者が記述した「将来の学業達成に関する目標」が学業達成に関する上位目標となっているのかどうかを第1著者と心理学を専攻する大学生の2名で独立に確認した。確認した具体的な内容は、その目標が学業達成に関するものであるか、抽象度が高い目標になっているか、の2点であった。その結果、64名すべてにおいて、上位目標が活性化されていると判断した。目標の内容としては、「学業面において、今後自分がしたいことを見つける」、「さまざまな分野の知識を身に着ける」、「知識人になる」、「博識な人になるために、様々な分野の学問に触れる」、「生涯を通して学びたい領域を発見する」などであった。

制御焦点（促進焦点，防止焦点）と下位目標（達成，未達成）を独立変数，課題2のパフォーマンス得点を従属変数とする2要因分散分析を行った。その結果，制御焦点（ $F(1,60) = 5.17, p = .03, \eta_p^2 = .08$ ）および下位目標（ $F(1,60) = 7.63, p = .01, \eta_p^2 = .11$ ）の主効果が有意となった。また，交互作用（ $F(1, 60) = 5.82, p = .02, \eta_p^2 = .09$ ）が有意となった。

単純主効果検定を行ったところ，制御焦点の単純主効果は，下位目標未達成条件で有意となり（ $F(1, 60) = 10.98, p = .00, \eta_p^2 = .16$ ），防止焦点条件（ $M = 11.94, SD = 4.65$ ）が促進焦点条件（ $M = 7.75, SD = 2.38$ ）よりもパフォーマンス得点が高かった。一方，下位目標達成条件では有意とならなかった（ $F(1, 60) = 0.01, p = .92, \eta_p^2 = .00$ ）。

下位目標の単純主効果は，促進焦点条件で有意となり（ $F(1, 60) = 13.39, p = .00, \eta_p^2 = .18$ ），下位目標達成条件（ $M = 12.38, SD = 2.34$ ）が下位目標未達成条件（ $M = 7.75, SD = 2.38$ ）よりもパフォーマンス得点が高かった。一方，防止焦点条件では有意とならなかった（ $F(1, 60) = 0.06, p = .81, \eta_p^2 = .00$ ）。結果を Figure 1 に示した。

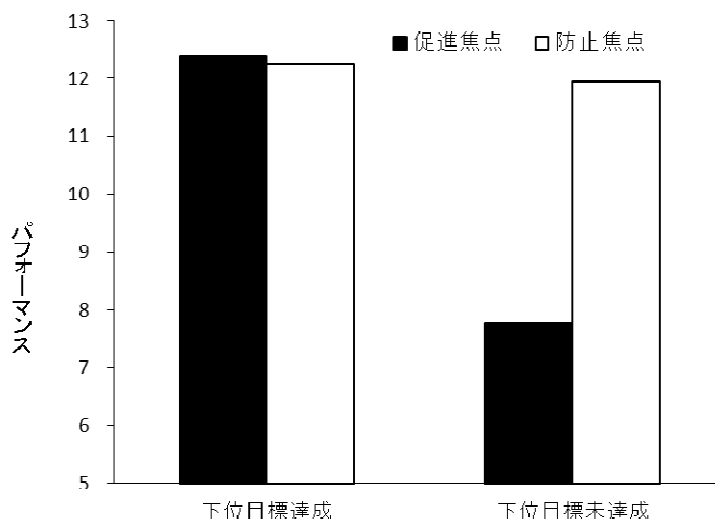


Figure 1. 制御焦点（促進 v.s. 防止）と下位目標達成（達成 v.s. 未達成）がパフォーマンスに及ぼす影響

4. 考察

本研究では、上位目標が活性化されている場合の、制御焦点と下位目標の達成が後続課題のパフォーマンスに及ぼす影響について検討した。上位目標を活性化していない外山他（2019）では、ある目標を達成すると、防止焦点は促進焦点よりもパフォーマンスが低くなることが示されている。しかし、本研究の結果より、上位目標が活性化されていれば、防止焦点は下位目標が達成されていても後続課題のパフォーマンスは促進焦点と同程度であることが示された。上位目標が活性化されていると、1つの下位目標が達成された時に、その下位目標の達成自体ではなく上位目標に焦点が当てられる。そのため、別の下位目標を、達成された目標の補完的なもの（complements）とみなすので、別の下位目標への追求を強めることが示されている（Fishbach et al., 2006）。本研究の防止焦点における結果は、先行研究と一致するものである。

また、先行研究（Fishbach et al., 2006）では、上位目標が活性化されている時に下位目標が未達成であると、上位目標と各下位目標のコミットメント（連合）自体が弱くなり（Soman & Cheema, 2004）、別の下位目標への追求の動機づけが低くなることが示されている。本研究において、そのような傾向が確認されたのは促進焦点条件においてのみであった。防止焦点条件においては、上位目標が活性化されている時に下位目標が達成されなくても、下位目標達成時と同程度のパフォーマンスを示しており、下位目標未達成条件におけるパフォーマンスは促進焦点条件よりも有意に高かった。これらの結果は、作業仮説を支持するものではなかった。どのように解釈すれば良いのであろうか。

本研究の結果は、上位目標が活性化されている時に下位目標が未達成であると、別の下位目標への追求の動機づけが低くなるというネガティブな効果は、制御焦点と手段の適合の効果によって低減されると考えることができる。制御焦点に関する先行研究では、制御焦点に合った手段（manner）を用いると、動機づけやパフォーマンスが高まることが示されている（Higgins, 2008）。手段としては、インセンティブの提示（Shah et al., 1998）、フィードバック（Idson & Higgins, 2000）、課題を実施する際の方略（Higgins, 2008）などが扱われている。損失の在・不在に焦点が当てられている防止焦点は、促進焦点に比べて、失敗のフィードバックが与えられた時に、動機づけやパフォーマンスが向上することが示されている（Idson & Higgins, 2000; 外山・湯・長峯・三和・相川, 2017）。以上の諸研究の

知見を踏まえると、上位目標が活性化されている時には、Fishbach et al. (2006) で示された、下位目標が未達成であると、別の下位目標への追求の動機づけが低下するという効果が見られるが、防止焦点に動機づけられている個人は、“平均以下に入ることを回避できなかった”というネガティブなフィードバックを受けることによって、本来ならば見られる動機づけの低下が起こらず、パフォーマンスが維持されたと考えられる。他方、獲得の在・不在に焦点が当てられている促進焦点は、防止焦点に比べて、成功のフィードバックが与えられた時に、動機づけやパフォーマンスが向上する (Idson & Higgins, 2000; 外山他, 2017)。しかし、促進焦点に動機づけられている個人の下位目標達成条件においては、上位目標が活性化されることによるポジティブな影響を受けているために、動機づけが十分に高い状態にあったと考えられる。そのため、“平均以上に入ることができた”というポジティブなフィードバックを受けても、それ以上には動機づけが上がり、下位目標達成時における促進焦点と防止焦点では、パフォーマンスに差が見られなかったと考えられる。

しかし、以上の考察は推論の域を超えておらず、今後は、Fishbach et al. (2006) の効果と制御焦点と手段の適合による効果の関係について、その優先順位を含めて詳細に検討しなければならないだろう。

Rosenzweig & Miele (2016) が指摘している通り、制御焦点とパフォーマンスの関連を検討した研究は、まだその数が少ない。数少ない研究においては、課題のタイプを特定化し、どのようなタイプの課題であったらどちらの制御焦点のパフォーマンスが優位となるのかの検討が行われている。しかし、本研究の結果は、促進焦点と防止焦点でパフォーマンスに差は見られないタイプの課題であっても、上位目標の活性化と下位目標の達成によって、どちらのパフォーマンスが優位となるのかが異なることを示した。外山他 (2019) では、上位目標の活性化を行っていないが、そのような文脈では、下位目標が達成されている時においてのみ、促進焦点が防止焦点よりも後続課題のパフォーマンスが高いことが示されている。一方、本研究の上位目標が活性化されている状況では、下位目標が未達成である時においてのみ、防止焦点が促進焦点よりも後続課題のパフォーマンスが高いことが示された。

近年の目標に関する研究では、1つの目標しか扱ってこなかったこれまでの研究を問題視し (Fishbach et al., 2006), 複数の目標をどのように人が評価し、選択するのかについて焦点が当てられている (Kruglanski et al., 2002; Shah & Kruglanski, 2003)。同じ上位目標に関連した下位目標間の目標追求のプロセスについては、Fishbach et al. (2006) を除いてこれまで検討されることは少なかったが、一般に人は同時にたくさんの目標を抱えているため、下位目標間のバランス (cf. Dhar & Simonson, 1999; Fishbach & Dhar, 2005) の中で目標追求を考えていかなければならない。本研究は、下位目標が達成された時と達成されていない時における後続課題のパフォーマンスが、制御焦点によって異なること、さらに、そのパターンが上位目標の活性化によって異なることを示した点において、一定の学術的貢献を与えるものと考えられる。

今後も、制御焦点とパフォーマンスの関連を検討する際には、複数の目標 (課題) の中での当該目標 (課題) のパフォーマンスについて検討していく必要があるだろう。また、競合する目標間の目標追求プロセスについても、今後検討していく必要があるだろう。

謝辞

実験の実施にあたり、筑波大学人間学群心理学類 (所属は当時) の清水登大さんと白石春香さんの協力を得た。心より感謝申し上げます。また、実験にご協力いただいたすべての方々に、厚く御礼申し上げます。

引用文献

- Bem, D.J. (1972) Self-perception theory. In L. Berkowitz(Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 6, pp. 1-62), New York: Academic Press.
- Carver, C.S., & Scheier, M.F. (1998) *On the self-regulation of behavior*. New York: Cambridge University Press.
- De Dreu, C.K.W., Baas, M., & Nijstad, B.A. (2008) Hedonic tone and activation level in the mood-creativity link: Toward a dual pathway to creativity model. *Journal on Personality and Social Psychology*, 94: 739-756.
- Dhar, R., & Simonson, I. (1999) Making complementary choices in consumption episodes: Highlighting versus balancing. *Journal of Marketing Research*, 36: 29-44.
- Eitam, B., Miele, D.B., & Higgins, E.T. (2013) Motivated remembering: Remembering as accessibility and accessibility as motivational relevance. In D.E. Carlston (Ed.), *The Oxford Handbook of Social Cognition* (pp. 463-475). New York, NY: Oxford University Press.
- Festinger, L. (1957) *A theory of cognitive dissonance*. Evanston, IL: Row, Peterson.
- Fishbach, A., & Dhar R. (2005) Goals as excuses or guides: The liberating effect of perceived goal progress on choice. *Journal of Consumer Research*, 32: 370-377.
- Fishbach, A., Dhar R., & Zhang, Y. (2006) Subgoals as substitutes or complements: The role of goal accessibility. *Journal of Personality and Social Psychology*, 91: 232-242.
- Gollwitzer, P.M. (1999) Implementation intentions: Strong effects of simple plans. *American Psychologist*, 54: 493-503.
- Guilford, J. P. (1967) *The nature of human intelligence*. New York, NY: McGraw-Hill.
- Higgins, E.T. (1997) Beyond pleasure and pain. *American Psychologist*, 52: 1280-1300.
- Higgins, E.T. (2008) Regulatory fit. In J. Y. Shah & W. L. Gardner (Eds.), *Handbook of Motivation Science* (pp.356-372). New York: Guilford Press.
- Higgins, E.T., Idson, L.C., Freitas, A.L., Spiegel, S., & Molden, D.C. (2003) Transfer of value from fit. *Journal of Personality and Social Psychology*, 84: 1140-1153.
- Idson, L. C., & Higgins, E.T. (2000) How current feedback and chronic effectiveness influence motivation: Everything to gain versus everything to lose. *European Journal of Social Psychology*, 30: 538-592.
- Kruglanski, A. W., Shah, J.Y., Fishbach, A., Friedman, R., Chun, W.Y., & Sleeth-Keppler, D. (2002) A theory of goal system. In M.P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (vol.34, pp. 331-378). SanDiego, CA: Academic Press.
- Molden, D.C., Lee, A.Y., & Higgins, E.T. (2008) Motivations for promotion and prevention. In J. Shah, & W. Gardner (Eds.), *Handbook of motivation science* (pp. 169-189). New York: Guilford Press.
- Rosenzweig, E.Q., & Miele, D.B. (2016) Do you have an opportunity or an obligation to score well?; The influence of regulatory focus on academic test performance. *Learning and Individual Differences*, 45: 114-127.
- Roskes, M., Elliot, A. J., Nijstad, B. A., & De Dreu, C. K. (2013) Time pressure undermines performance more under avoidance than approach motivation. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 39: 803-813.
- 佐藤 雄 (2003) 集団での学習性無力感実験における統制不可能性の検討 日本健康心理学会 第 16 回大会発表論文集, 156-157.
- Scholer, A.A., & Higgins, E.T. (2012) Too much of a good thing? Trade-offs in promotion and prevention focus. In R. M. Ryan (Ed), *The oxford handbook of human motivation* (pp.65-84). New

York: Oxford University Press.

- Shah, J.Y., Higgins, E.T., & Friedman, R. (1998) Performance incentives and means: How regulatory focus influences goal attainment. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74: 285-293.
- Shah, J.Y., & Kruglanski, A.W. (2003) When opportunity knocks: Bottom-up priming of goals by means and its effects on self-regulation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 84: 1109-1122.
- Soman, D., Cheema, A. (2004) When goals are counter-productive: The effects of violation of a behavioral goal on subsequent performance. *Journal of Consumer Research*, 31: 52-62.
- 外山 美樹・湯 立・長峯 聖人・三和 秀平・相川 充 (2017) プロセスフィードバックが内発的動機づけに与える影響—制御焦点を調整変数として— *教育心理学研究*, 65: 321-332.
- 外山 美樹・長峯 聖人・湯 立・肖 雨知・三和 秀平・相川 充 (2019) 制御適合がパフォーマンスに及ぼす影響—目標達成の観点から— *教育テスト研究センター年報*, 4: 1-10.
- 外山 美樹・湯 立・長峯 聖人・三和 秀平・相川 充 (2019) 防止焦点は認知資源の温存効果に優れているのか? *心理学研究*, 90: 242-251.
- Trope, Y. & Liberman, N. (2003) Temporal construal. *Psychological Review*, 110: 403-421.
- Unsworth, K., Yeo, G., & Beck, J. (2014) Multiple goals: A review and derivation of general principles. *Journal of Organizational Behavior*, 35: 1064-1078.
- Vallacher, R.R., & Wegner, D.M. (1987) What do people think they're doing? Action identification and human behavior. *Psychological Review*, 94: 3-15.
- 山岡 明奈・湯川 進太郎 (2017) マインドワンダリングおよびアウェアネスと創造性の関連 *社会心理学研究*, 32: 151-162.